

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390800086		
法人名	有限会社 誠心会		
事業所名	グループホーム ゆとり		
所在地	熊本県山鹿市菊鹿町下内田75		
自己評価作成日	平成26年3月8日	評価結果市町村受理日	平成26年5月9日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5
訪問調査日	平成26年3月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

静かな環境にあり、自然と密に接することが出来るホームである。朝には小鳥のさえずり等を聞きながら、四季の移り変わりを感じ取れゆったりとした環境で生活出来ている。ホーム裏の畑では季節の野菜を作り昔ながらの風景である。心身ともにゆとりある暮らしが出来よう、職員は日頃から温かみのある言葉遣いをし、その中にも笑い声が絶えない安心して生活できる環境づくりをしている。御家族には出来る限り面会をお願いし、御家族との絆が途絶えない様にも気をつけている。又、御家族が希望されれば、最期までホームで過ごして頂ける様、「今」出来ることを大切にしている。スタッフは内部・外部研修と通じて常にスキルアップ出来るよう自己研鑽している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

* 自然豊かな環境の中で四季を通じての外出や家庭菜園作りといった様々な活動は、利用者に懐かしい体験を思い起こさせてくれる。裏庭にある柿や栗・竹の子あるいは近隣住民から頂いた梅等を、利用者自身が知恵と技を發揮して職員とともに調理・加工した後食する等、利用者は季節ごとの旬の味を満喫している。* 利用者にとって家族の果たす役割が大きい事を入所時に説明し、家族と利用者の関係継続の強化を図り、プロとしての知識や技術を備えた職員のケアと職員では補えない家族の愛情を重ねる事で、更に利用者の生活の質を高めている。* 開設当初から人権尊重と接遇マナーを重視しており、継続した研修を実施し、拘束をしないケアや排泄の自立支援等、利用者本位のケアに繋がりを、利用者の穏やかな表情を引き出している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	現在、ゆとり独自の理念を作成中。一年間話し合いを重ね、4つに選ばれている。来月の会議では決定予定。決定後は、職員で共有・実践に努めていく。	社訓を理解し基本とした上で、グループホーム「ゆとり」独自の理念を作るため、全職員が大切にしたい言葉を持ち寄り話し合いを重ねてきた。その過程で自分たちが目標とするケアを実現するのだという意志が更に高まっている。新年度に向けて自分たちの思いを込めた理念を共有し、これまで以上に利用者本位のケアを実践していくことを全職員で確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	毎年、もちつき・夏祭りには地域の方、サポートリーダー、民生委員さんと協力をして頂き、地域との交流出来ている。又、地域の行事(マラソン大会、文化祭)にはこちらから出向き、地域との交流を図っている。	野菜をいただいたり、気軽に挨拶を交わす等の近所付き合いがある。「ゆとり」で恒例の餅つき会や夏祭り等のイベントを実施したり、市の文化祭や「あんずマラソン大会」の応援に出向く等、積極的に地域との交流を図っている。小学校の運動会では席が準備される等温かく迎えられる他、一緒に踊る機会もあり、より楽しめる運動会が組み立てられ、交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元の中学校での子供サポーター養成講座(絵本教室)への参加、徘徊声掛け模擬訓練の参加声掛けを行いながら、地元住民にも認知症への理解の為、日々認知症について話をしている。地元住民からの質問等にもその都度助言している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回、開催している。役場、民生委員、サポートリーダー、消防署、警察、社協多数の参加を頂き、取り組み等報告出来ている。事例検討等の紹介も行い、助言を頂きサービスに生かしている。	介護保険課・包括支援センター・民生委員・サポートリーダー・消防署・警察・家族等、多様なメンバーの参加を得て運営推進会議が開催されている。課題を抱えた地域高齢者に関しての情報提供に基づいて、それぞれの立場から提案や意見交換を行い、認知症への関心や理解を深めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	役場とは日頃から連絡を取り合っており、介護保険課等が開催する研修にも積極的に参加している。運営会議でも介護保険課・包括支援センターの方に相談しながら、助言を頂きながら取り組んでいる。	ホームは市の委託で「認知症介護相談」の窓口になっており、毎月相談受付表の提出のため市役所へ出向き、情報を交換している。徘徊模擬訓練の詳細について市当局と話し合いを重ね、双方が協働し、積極的に連携を図り成果を上げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行っていない。玄関の施錠も夜間のみで、日中は施錠行っていない。自由に出入り出来る状況である。職員は研修を通じて身体拘束がもたらす弊害について学び、スピーチロックにも注意を払い、ケアに取り組んでいる。	夜間以外は玄関の施錠はされておらず、いつでも行きたい所に自由に外出している。頻繁に外出する利用者にも、その都度「行ってらっしゃい」と送り出し、様子を見ながらタイミングを計って声をかけて誘導し、利用者の誇りを傷つけないよう努めると同時に安全に配慮している。職員は内部・外部の研修に参加する事で、拘束に関して理解を深め、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃より職員同士で、不適切なケアではないか、虐待ではないか話し合いながらケアを行い、虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	実際の活用例はまだないが、外部研修にて理解を深めている。又、マニュアルも置いてあり、いつでも確認できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前から、しっかりと時間をかけ、事業所の説明・内容を説明し、納得頂いてから契約して頂くようにしている。契約後にも疑問・質問があればその都度傾聴し、お答えするようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回家族会の開催をしており、御家族の思いや意向を傾聴するように努めている。その他にも毎月の面会時等にはご利用者様の状態を報告し、要望などないか確認を行っている。必要時にはその都度上司に報告している。	毎年11月11日「介護の日」を家族会の日と定め、家族の意見、要望に耳を傾けている。利用者にとって家族が果たす役割が大きいことを入所時に説明し、家族と利用者の関係継続の強化が図られ、外出・外泊・面会が多くあり、意見・要望を聞く良い機会となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の会議では代表者・管理者も参加し職員の話も聞いている。必要に応じ、個別にて面談も行っている。職員の意見はすぐに検討し必要であれば、すぐに反映するよう努めている。	毎月開催する職員会議の議長を職員が順番に担当し、議長は研修報告や事例検討、業務に関する事等テーマを決め、会議に参加できない職員にテーマを伝えて、意見を聞き取り会議に反映している。全職員が運営に積極的に関わりを持つことで意思統一が図られ、実りある会議となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者はすべての勤務状況を把握している。役職者が常に報告をしており、勤務状況や努力等を加味し昇給にもつながっている。又、外部研修の機会も設けて頂き、向上心を持って勉強できる環境づくりをしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内外の研修多く、一人一人の力量に合わせてた研修に声をかけてくださっている。今年も年間を通じて社内での外部講師による研修もあり、職員は学ぶ機会が多く、働きながらスキルアップ出来ている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会への参加。主催の研修に参加し、他事業所の方との交流出来ている。徘徊声掛け模擬訓練では近隣のグループホームの方とも連携をし協力し合っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の生活の場へ出向き、必ず本人に会ってアセスメントし本人の思いに向き合うようにしている。又、生活習慣や本人のこだわりをホームでも提供出来る様情報収集行っている。なおかつ職員との信頼関係を築ける様努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	不安や悩みを聞きだせるような環境づくりを行い、受け止める様努力している。不安点等は面談や電話等でも行い、常に傾聴し安心できる関係づくりを目指している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談の内容をしっかりと聴き取り、何が必要なのかを一緒に話し合い、どのような支援をするのか助言しながら一緒に決めている。ホーム以外での選択も検討しながら話し合っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今まで生きてこられた経験を十分に生かして頂きながら、決してあきらめず、出来る事はして頂く、喜び・達成感を一緒に味わい、共に支え合う関係づくりをしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	何か変化があれば、すぐに御家族へ連絡し、一緒にケアの方向性を考えている。外出や病院受診等御家族が出来る事は出来る限りして頂いている。時にはご自宅へも帰られたりし御本人の要望に職員・家族と協力し叶えられるよう協力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親戚の方や地域の方の面会がある時はゆっくりお話し出来る様、居室等に案内している。自宅に帰られた時は近所の方が来て話をしたり関係続いておられる。又、地域の行事に参加すれば、自然とお会いしたり馴染みの関係づくり継続出来ている。	家族と一緒に実家に帰り、仏壇にお参りしたり、行きつけの美容室やお店に買い物に行く等本人の希望を叶える支援を基本としている。利用者の地域の民生委員の来訪や、友人や知人が人づてに入所を聞きつけて訪ねてくる等、馴染みの関係が継続している。職員は来訪者を暖かく迎え入れ、再訪に繋げる努力が見られた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の心づかい、助け、心配など見られ、入居者同士の関係出来ている。職員は口を出しすぎず、見守りをし関係性を大切にしている。状態が重度化した場合にも職員が会話の架け橋となり、関係性継続出来る様支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	実際にサービスが終了した後にお手紙を頂いたり、関係性を大切にしている。お会いした時には状況を伺うなどしている。又、夏祭りなどには参加のお誘いを行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思い・希望は日頃の何気ない会話からくみ取り、記録に残し、職員全員で共有するようにしている。出来るだけ本人の思いに寄り添い、希望に沿った暮らしが出来る様にしている。	一人一人の思いを把握するために利用者が発したそのままの言葉を記録し、センター方式シートを活用して、家族や地域住民から情報を得る等、多様な方法を用いている。日中は利用者の好きな歌手の楽曲を流す等、日々の生活の中で利用者の想いに沿った支援が行われている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時から生活歴・馴染みのくらしはアセスメントし、センター方式、わたしの暮らしのまとめシート等活用し情報収集している。入居後も友人や親戚から聞いた情報を大切に把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタルチェック、身体チェック、顔色チェックは当たり前の中、日々のちょっとした気づきを見逃さず、記録に残し、職員で状態の把握している。出来る・できないシートも活用し、出来る力を最大限発揮できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	まずは本人に希望・要望・思いを確認し、目標になるプランづくりを行っている。状態に変化があれば、すぐにプランの見直しも行っている。	「車いすで自走する」「お茶碗を持って食べる」等、実現可能な具体的プランを作成する事で、利用者に成功体験や達成感を味わってもらい、次のステップに繋がるように努めている。尚、定期的にはアセスメント・モニタリング・カンファレンスを実施し、プランを作成。状態変化時は随時見直し、現状に即したプランに変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気づきは必ず記録に記載している。記録が申し送りにもなっているので、情報の共有も出来ている。又、日々変わる状態に関しては職員間で都度話し合いがもたれ、ケアの見直し、プランの見直しにもなっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	御家族との外出時・外泊時等状況に変化があった時にはその都度連絡して頂き、柔軟に支援できる環境を作っている。外泊中困った事があれば、自宅へ出向く事もしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員の訪問やボランティアの方の訪問を通うして、地域との関わりを深めている。又、地域への行事にも積極的に参加し、地域との交流も継続して行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医への受診は基本的に御家族へお願いしている。専門医等の受診に関しても、御家族へお願いしているが、病状等によっては職員が家族と一緒に同行し情報を提供するなど行っている。急変時は往診を依頼し、柔軟に対応している。	かかりつけ医に関しては本人・家族の希望を尊重している。家族が利用者の状態を把握していることは大切とする事業所の方針で、家族の充分な理解と同意を得、家族による通院介助を基本としている。病状によっては職員も同行する。歯科・皮膚科・眼科等、専門医に関しても適切に受診を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々状態報告を看護師にしており、看護師の指示を受けながらケアにつなげている。必要に応じて受診につなげたり、御家族とも連携を取りながら情報の共有化をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはすぐに病院に情報提供している。必要に応じて電話での情報提供も行っている。職員もこまめに見舞いにいき、状態の把握に努めている。面会時には病院と情報を交換し連携をとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態の変化に合わせ、その都度御家族と方向性の確認をしている。看取り希望の方には早い段階から話し合いを重ね、終末期にかけて話し合いを重ねるようにしている。	看取りの指針は入所時に家族に説明しており、重度化した場合、その都度、家族の2名から意向の変化の有無を確認している。家族はいつでも面会や付き添いが可能である。職員は利用者が好きな花や写真を飾り、好きな音楽を流したり、こまめに部屋を訪ね声を掛ける等、孤独を癒す努力をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署主催の救命法研修に参加し、急変時の対応の指導を受けている。職員同士でも急変時の対応を話し合い、緊急時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回避難訓練をしている(消防立ち合い、自主訓練)消防からの助言・指導を頂いた事はマニュアル化し職員に浸透させている。又、運営会議でも報告し、地域への協力を呼び掛けている。	消防署から避難が終了した部屋に目印を付ける事、メガホンを用意する等のアドバイスがあり、訓練時に取り入れている。運営推進会議の日に合わせて避難訓練実施を計画している。尚、運営推進会議のメンバーが避難訓練に参加すると、これまでとは異なった視点の新たな発見や気づきが生まれ、より充実した避難訓練になると思われる。	運営推進会議のメンバーの参加を得て避難訓練する事が、地域との協力体制を構築する第一歩となることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人とし尊厳を持ったお声掛けをしている。誇りやプライバシーにも十分に配慮し、ケアにつなげるようにしている。職員同士でも注意しあいながら、尊重した言葉遣いに気をつけている。	接遇マナーと利用者の尊厳を重要視しており、継続した研修を実施している。利用者との親密度が増してくると言葉が砕け過ぎ、節度を欠いてしまう場合があり、言葉使いに違和感を感じた時は、その場で注意しあっている。職員の利用者を尊重する優しい言葉使いや態度が見られたことから、日ごろの指導が行き届いている事が感じられた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	必ず、御本人にどうされたいか確認をし、自己決定できる環境づくりに努めている。又、思いを言い出せない利用者様には、話しやすい環境を作ったりし、自己決定出来る工夫をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事・入浴の時間等、その方の希望に沿って行っている。業務中心にならないよう職員には毎回の会議でも伝え、利用者様中心のケアを心がけている。散歩へ出かけた方は一緒に散歩に行ったりし柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人のこだわりの服を選んだり、鏡をみて自分で髪をとかしたり、おしゃれが出来る様支援している。時にはお化粧品をして外出する等している。カットは御本人の希望されるよう、カラーをしたりパーマをかけたりにされている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑と一緒に野菜を作り、収穫しメニューを決め一緒に料理するようにしている。季節の野菜等はふんだんに取り入れ、昔作られたメニュー等聞きながら一緒に作り食事の時間を楽しんでいる。	取れたての野菜を使い、カツオやいりこで取っただしを用いて、自然の味を活かした料理を作ることにこだわりを持っている。利用者は目にした食材を見、それを刻む音を聞き、自主的に準備や味見に参加しており、利用者が主体性を発揮して自らの能力を活かすことが出来る支援となっている。職員と利用者が同じテーブルで会話を楽しみながら食事をする和やかな光景が見られた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重の推移等も見ながら栄養状態を把握している。カロリー計算まではしていないが、昔ながらの食事で栄養には気をつけている。水分摂取量が少ない方には梅ジュースやお茶ゼリー等を作り水分補給して頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。出来るだけ自分で行って頂き、磨きなおし等をケアしている。口腔内のチェックも行い、異常があれば、歯科受診・往診なども行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツ→紙パンツ→布パンツに移行できるよう、排泄パターンを把握し、トイレでの排泄を誘導している。実際に日中は布パンツの利用をされている方が増えている。皮膚トラブル等も減ってきている。	昼間はトイレでの排泄を基本とし、排泄の自立に取り組んでいる。入所当時はおむつ使用であっても、職員が排泄パターンや仕草から排泄のタイミングを把握し、声かけ誘導し、布パンツに移行出来た例が多数ある。夜間の排泄に関してはトイレ誘導したり、安眠を妨害しないようにパットを使用する等、個々の状態に応じた対応が取られていた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬に頼りすぎず、自然な排便があるよう日頃から水分摂取、腹部マッサージをする等して気をつけている。水分摂取が苦手な方は御家族からジュースやヨーグルトなど持参してもらいながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は基本的に自分の好きな時間に入って頂くようにしている。その日の状態に合わせて、夜眠れない方等は夜間入浴してもらうこともある。又、失禁状態等に応じて柔軟に入浴できる環境を作っている。	利用者の「入浴したい」という気持ちを大切に、タイミングを見逃さないよう声掛けを行っている。「ザ・シャワー」という入浴設備による入浴は車いすのままの入浴が可能。ミスト状のお湯は体を十分に温め、体力が低下した利用者も車いすで入浴出来るため、清潔保持と入浴を楽しむ支援に繋げている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、居室で休みたい方、ソファで休みたい方、その方の希望を聞き、休んで頂ける様にしている。昼夜逆転につながるような、適度な昼寝をお声掛けしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情をカルテにはさんでおり、いつでも確認できるようにしている。薬の変更時には経過観察を行い、異常時には主治医に連絡するようにしている。又、お薬を最後まで飲まれたかを確認するように徹底している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯干し、茶碗洗い、フロアの掃除など出来る事は役割を持ってされている。買い物等も一緒に行き、一緒に食材を選んだりしている。季節に合わせた外出も取り入れ気分転換につなげている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	買い物に行かれたり、御家族と外食に行かれたり御家族とホームで協力して外出の機会を得ている。小学校の運動会や中学校の文化祭等にも参加させて頂き、外出の楽しみ継続出来ている。	会話を楽しみながらの散歩や、職員と一緒に出かける食材の買い物、家族と出かける外食や通院等、日常的な外出支援を行っている。彼岸花、秋桜等季節ごとの花見は利用者の楽しみとなっており、時には手作り弁当を持参して、近くの「あんずの丘」に出かけ、外出の楽しみを満喫している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には御家族が管理されている方が多いが、本人様がお金を持っていない事で不安になられる時などは所持されている。現在のところ実際は使用されることはない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	御家族から電話があった場合は子機を利用し居室でゆっくりお話しできるような環境を作っている。現在は手紙を書かれる方はいらっしゃらないが、本人宛に手紙が来た時には開封して頂き、御本人に渡している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間は優しい照明になっており、リラックス出来るフロアになっている。畳には掘りごたつもあり、ゆっくり過ごせる空間がある。不快な臭いがないようにも気をつけている。	リビングの壁にみんなで協力して作った桜の花が飾られ、季節感を表し利用者の心を和ませている。桜の名所を紹介した雑誌に見入っている人、ソファでゆっくりくつろいでいる人、心地よく自慢のものを披露している人等、職員のさりげない見守りの中で、それぞれに自由な時間が過ごされていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	炬燵でテレビを見られたり、ソファから外を眺められたり、思い思いに毎日過ごせる環境づくりをしてる。一人になられた時もそっと見守りをして、必要に応じてお声掛け・寄り添うようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には御家族の写真や、使い込まれたタンス・盆栽など置いてあり、その人らしい居室になっている。安心して居心地良く過ごせる空間づくりを御家族と話し合い行っている。	部屋の入り口には「山鹿市 ゆとり1丁目」という住所と「様」をつけない苗字だけの立派な表札が印象的。部屋の主として利用者を尊重して認めている表れであると感じられた。部屋へは自分の馴染みの物を持ち込み、壁には家族の写真が添えられた手紙が飾られる等、利用者を元気づける設えが施され、趣味の盆栽を持ち込んだ利用者は眺める時間を幸せな気持ちにさせており、それぞれにその人らしくくつろげる部屋となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来る事を重視し、現時点では出来ないことも出来る可能性を検討し、自分らしい自立した生活が送れるよう支援している。出来た時には共に喜び達成感を味わえるようなお声掛けを行っている。		